

1. 活動日時

令和元年 10 月 27 日（日） 5:30～18:00

2. 活動場所

茨城県久慈郡大子町

3. 活動の実際

6:15 大子町避難所訪問

(1) 保健師活動に同行

大子町保健師の避難所の健康相談に約 1 時間同行した。この保健師は「平成 27 年 9 月関東・東北豪雨」を経験している。前日に緊急入院があり、約 20 世帯、約 30 名が避難中であった。保健師は毎日、施設管理者の方、福祉課から避難者情報を確認のうえ、全員に健康相談を行っている。最近は感冒症状が多く出ていることを心配している。早くから片づけを始める方、仕事に通う方がいることから、早朝に急いで避難所から出発したい人を優先して相談を開始している。避難所は高台にあるため、高齢者の多い避難所では車が必要であるが、福祉課ではタクシー利用も含め、送迎のサービスを行っている。

3 名の保健師で順番に申し送り用紙を活用しながら、避難者の状況に合わせて健康相談を行っている。保健師は便秘、睡眠状況、持病の経過、体調不良（腰痛等）、食欲等の聞き取りに加えて、感冒が流行について相談、指導を行っている。感冒症状・胃のむかつき感・不眠を訴える疲労感の強い住民が多く、家屋の清掃や片付け、慣れない避難生活、生活の再建に向けた経済的な負担、住み慣れた居住空間から転居しなければならない可能性があることに関する不安などを口にしていた。保健師は症状に合わせて、うがいや手洗い、マスクの利用、下肢の運動等アドバイスをを行っている。家族単位での入室では、1 人が感冒に罹患すると家族への感染も考えられるため、さらに注意した指導を行っている。希望に応じて血圧測定を行っている。住民から「雨が不安」「夜、目が覚める」「咳が出る」「つかれる」「今後の生活が心配」の訴えがあった。保健師は被災者の顔色や口調等からも体調を気遣っていた。

(2) 避難所設備

70 代女性の方（A 氏）から部屋の写真撮影の申し出があり、お話をうかがった。洗濯を無料でさせてもらえること、食事を作る気がないのでお弁当をもらえることがありがたい。避難所はホテルのような宿泊設備になっており、1 世帯ごとに 4 人部屋の個室が提供されているが、A 氏のような独居の高齢者は 1 人で利用している。部屋はツインベッドと高床式の畳スペースがあり、共同利用の洗濯機、乾燥機、シャワー、入浴の設備も整っており、テレビはロビーに 1 台設置されている。食事は食堂を利用し、3 食とも弁当が配食されている。また、炊き出しの実施はなく、住民は嗜好に応じてスーパーなどから購入したものを摂取している。町の栄養士会の介入支援もあり、保健師を通じて必要な住民へ栄養補給サプリメントを配っている。栄養士会が避難生活中の食生活で注意すべきことについてのパンフレットを配布していた。

(3) 避難者 B 氏

近所の住民に促されて避難しようと思いきい自宅の外に出たときには、すでに水かさが増してきており、身動きがとれないと判断し、自宅内に戻った。すぐに首の高さまで水位が上がり、顔が浸かってしまう寸

前で畳が浮いてきたためその上に乗って一命をとりとめた。自宅は全壊になってしまい、被災した日に泥水に浸かった衣服のまま1~2日単位で生活場所を複数回移動した。被災後4日目に入浴することができ、被災後1週間前後で現在の避難所に辿りついた。持病があり町外の病院へ通院しているが、鉄道の遮断などにより、容易に病院へ行くことができなくなってしまった。最近、四肢の浮腫が改善しないため、受診したところ、貧血を指摘された。避難所に入ってから被災前と食事が変わったことにより、このようなことになったのではないかと話す。移動手段もタクシーなどの利用をせざるを得なく、経済的な負担も増加している状況であった。保健師の1回/日の健康チェックにより経過観察中であり、生活の面での支援に関しても保健師が窓口となり、行政とつながっており必要な情報が提供されている。

9:30 大子町避難者(A氏)の自宅訪問

町の中心部に2階建ての一軒家に住むA氏は、8年前に母の介護で大子町に帰ってきたが、母の死後、現在は1人暮らしである。10月13日は携帯電話の避難情報で、犬と携帯電話をもって避難所に移動した。避難所では、犬を2日間ゲージから出してやるができなかった。現在の避難所に移動する際にも犬を連れて行くことができず、自宅に置いている。自宅は床上135cmまで浸水、罹災証明では「大規模半壊」であり、現在ボランティアに泥をかいてもらい、床の半分をはがして、清掃などもしてもらっている。ライフラインは戻っているが、食事を作る気にはならず、日中は自宅の片づけ、夜は避難所の生活を送っている。東京に息子もいるが心配かけないように被害について具体的には話していない。昨日ボランティアが15人も来て片付けてくれたことはとてもうれしかった。亡くなった母を知る多くの方が気遣ってくれ、いろいろ手配してもらっている。

11:00-14:00

461号線、13号線(主要地方道)、県道205線等を走行し、大子町の被災状況を確認する。いくつか決壊や氾濫の跡が見られたが、「袋田の滝」は報道どおりに回復しており、観光客の姿もみられた。町内でも全く被害のないところもある。

14:00 大子町救護所

救護所は10月15日からスタートし、途中、茨城県医師会によるJMATに引き継ぎ、10月27日まで開設した。訪問日には県内の病院から医師2名、看護師2名、薬剤師1名が派遣されていた。開設当初は20名程度が利用したが、2週目には10名程度、最近では数名の利用になっている。開設時間は、9:00-12:00、13:00-16:00であったが、近隣の医院・病院が通常診療に戻ってきたため閉所になった。

15:30 大子町ボランティアセンター

大子町社会福祉協議会が運営している。町内約5か所の地域で大きく浸水被害があり、中でも町役場周辺の土地が低く、過去にも川の水が越水し浸水したことがある。被害家屋は500軒以上で、8割が床上浸水の被害であった。65歳以上の人口割合は45.6%と高齢化が進んでいるため、高齢者への支援の必要性が高いと考えている。また、ボランティア介入の公平性と押し付けにせず支援できるよう調整が大切であると話される。ボランティアは多い時で500人/日(近隣の高校生や大学生も含む)の参加があり、被災後2週間が過ぎている状況で361人/日であった。

被災者はボランティアへ依頼することに対して遠慮や抵抗感があり、依頼しない状況がある。また高齢者は固定電話が流出しており、依頼するための連絡をすることができない住民が一定数いる。また、避難所に移動していたり、親戚のいる他市町村へ一時避難していて連絡のつかない住民もいるため、家屋と家屋周辺の片付けや清掃などを進めることができていない状況がある。これらの対策として、住民のこ

とをよく理解している社会福祉協議会が中心となり、ボランティアの協力を得てヒヤリングとニーズ抽出のために町のローラー作戦を開始することになっている。

17:00 大子町保健センター

地域医療連携会議に参加した。この会議も救護所の閉所に伴い、今回が最終の会議であった。チラシ「大子町対策本部からのお知らせ」、救護所利用データの紹介があった。消防からの救急車の利用状況、避難所状況、ボランティア数が報告され、今後の医療体制やメンタルケアの重要性について確認した。閉所にあたって参加している病院医師より、町内の医療機関が被害直後の想定より早く回復し、被災前の状況までの回復にかなりめどが立ってきたとの報告があった。保健師から、町内の医師会がいつも参加してくれたことで町内の医療機関状況が良く把握でき、県の医療コーディネーターとの連携がうまくいったことに対する御礼があった。保健センターの保健師の頑張りがあったこと、また、互いにストレス・疲れがたまらないようにねぎらいや気遣いの言葉があった。

所感

- ・保健師は早朝から、避難者の1日の動向に合わせて、タイムリーで個別性を踏まえた健康相談を行っていた。前日までの情報が保健師間で申し送りされ、渡せていなかったパンフレットやうがい薬などが避難者に適切に届けられていた。
- ・高齢の被災者は、住宅の全壊・半壊により、生活の再建に向け、身体・精神・経済的な負担が大きい。怒りや悲しみなどの感情が入交じり、加えて体の不調も生じる中で再建する力を持つことが難しい被災者もいる。また、生活の再建のスピードも緩やかになってしまうため、周囲との違いに焦りや孤立感が生じやすい。この時期の被災者への支援はボランティアなどの支援による「自宅環境を整える」こと事体が精神的な支援につながると強く感じた。看護師として生活の再建への支援について改めて社会福祉協議会との協働の重要性を感じた。
- ・今回話を伺った避難所の住民(B氏)は高齢転入者であり独居であった。自宅内で夜間に台風のニュースを見ていて近隣の人から声をかけられ逃げようと決意した。近所のつながりの大切さ、人は誰でも正常性バイアスに陥る可能性があることを念頭におき域防防災活動の強化の必要性を感じた。
- ・A氏は早めに避難できたが、当時は携帯電話に何度も避難情報が流れており、どの情報を信じてよいかわからなかった。A氏が動いた後、10分程度でこの地域には一気に浸水が起こった。A氏は避難時に近隣の方に呼びかけたが、動くことができなかった方がいたことから、改めて避難のタイミングのむずかしさ、高齢者への意識づけについて考えさせられた。
- ・大子町の最終の地域医療連携会議に参加し、同地区の保健センターと医師会の連携が良くとれていることがうかがえた。消防、避難所、ボランティアなど被災者の健康・医療にかかわる職種が一堂に会する様子から繋がりが把握できた。

写真1：A氏の避難所内の様子（4人部屋を1人で使用）



写真2：A氏の自宅の様子（床上135cmの赤ラインまで水が上がった）



写真3：A氏の自宅の様子（処分が必要な家財道具）

